
召喚獣が還るまでver1.5

ヘル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

召喚獣が還るまでver1.5

【Nコード】

N7056L

【作者名】

ヘル

【あらすじ】

1、2話で今まで放置されてきた火竜アンディに纏わる比較的良好い話。このシリーズの笑いの要素はヤクザがいないとほとんどないのか！？

（前書き）

召喚獣が還るまで1、2はお読みください。でないという意味がわからないところも多々あります。後書きは2の設定等を書いてあるのでこの話しは事実上の3話になります。

―都内某安藤の部屋―「なんということだ……安藤が召喚されてしまった」

本来ならば俺が召喚されるべきはずの魔方陣は、強化召喚の輝きを見せると、何故か待ち構えていた俺を無視して惚けていた安藤を飲み込んで消滅した。俺は思案した結果「まあ、あの男なら大丈夫だろう」

そう一人ごちると、昼飯の続きに興じることにしたのだった。ちなみに俺の人間には俺の声は唸り声にしか聞こえないようだ。

俺の名前はアンディ……あらずじにも名前が出ていたし、俺が元の世界に帰れるのかもテーマっぽかったくせに一切取り上げられないまま放置されていた火竜アンディだ……特に本編では俺の役目はあんまりないから、まあ不都合は無い。俺が重要だったのは過去に置いてだ。……そうだな、どうせ暇だし向こうに呼ばれるか安藤が帰ってくるまで少し昔のことでも思い出そうか。

思えば安藤に会ったのは割と最近のことだった。1年くらい前に魔人キャンサーの配下と戦った際に、勢いあまってこちらの世界に落ちたのが原因だった。普段こちらの世界に固定されてしまったのは不便だが、幸いにしてプリムローズの召喚があれば一時的にしろ、あちらの世界には戻れるし、見知らぬ世界に行くのは俺にとって非常に心を引かれるものだった。しばらく適当に飛行をしていたらラスに絡まれてドッグファイトするはめになったりもしたがファイアプレスで焼き鳥にしてやった。勝利に気分を良くした俺はアクロバット飛行をして……急降下した際にトラックにはねられたのだった。火竜はトラックに追突されたくらいでは死にはしないが、打ち所が悪かったのか俺は気絶してしまっただけ。気付いた時には安藤に拾われてこの部屋にいた。安藤と俺のバイオリズムは不思議と一致した。安藤がでかけると召喚があっただし、安藤が飯を出すタイ

ミングは俺の腹の虫が鳴り出すころだった。思えば、俺と間違われて召喚される要素は至るところにあったのかもしれない。寝て起きたら同じ格好だったり、奴の舎弟が訪ねてくるときはベランダに近所の猫や鳩が俺を訪ねてきたり…全然知らない奴だったがまるで自分の分身のようだった。もし自分が人間なら安藤とはかなり似ていたのではないかと思う。おそらく安藤はプリムローズに召喚されたのだろう。俺はあの娘を小さい頃から知っているが、俺がいなくて大丈夫なのか少し不安になった。

プリムローズと出会う前の俺は、東の火山に火竜アンディあり、と吟われるほどに有名なボスモンスターとして君臨していた。魔族ですら立ち寄らない火山の頂上に、様々な財宝を蓄えていた俺はある日話相手が欲しくなったのだった。気が付いた時には最強生物ドラゴンの最高峰として君臨していた俺は孤独だった。思い立ったが吉日とばかりに俺は近所の人間の村に遊びに行ってみた。しかし普通に広場に着地した俺に対して人間共はパニックに陥り逃げ惑っていた。ああ……知能があるといっても下等生物ではこんなものか、そんな諦めがあったのだが、俺は俺の足元で俺を見上げるピンク頭のチビ、プリムローズに初めて会ったのだった。

竜語で話しかけた後に俺は人間と言葉が通じないことがわかった。しばらくして悲しそうな顔をしたプリムローズの元に母親らしい赤い髪の女がやってきた。俺がダメ元で竜語で、「この子供は人間の癖に俺を怖がらないな」と話しかけるとピンクのチビの母親らしい赤毛の人間は、警戒しつつも竜語で話しかけてきた。プリムローズの母親、ローズはレベル80を超える召喚士だった。俺はこの親子に興味を持ったので戯れにローズと召喚の契約を結んだのだった。それから数年間は平穏な時が過ぎた。召喚士ローズはマメにプリムローズに己の技を教えながら竜語も教えていた。俺もチビとかプチローズとか呼びながらたまに会話をしたものだ。やがて二人と俺は旅に出た。ローズはまだ若かったが、昔の古傷が原因で残された時間はあまりなかった。自分の生きているうちにきちんとした召喚士

学校に入れておきたいからと、北の皇国へと旅は続いた。プリムローズはローズから受け継いだ才能か、皇国の召喚士学校に入ると飛び級で進級をしていた。しかしその速度の副産物として彼女は孤独になっていった。回りにいた奴等はほとんど置いてきぼりにされ、プリムローズは環境に振り回され友達ができなかった。プリムローズが学校を主席で卒業するころローズは死んだ。旅に出た頃は後半年とか言っていたが三年ももたせたのだからローズの根性も相当なものだった。だがこれでプリムローズの回りには誰もいなくなった。俺もローズが死んだことで召喚契約が切れ、急速に枯渴した魔力のチャージのために一度山に戻らねばならなかった。召喚契約を結ぶと召喚士の能力分だけ魔力が底上げされるのだが、途中で死なれてしまうと、召喚獣の能力も低下してしまうのが召喚契約の珠に傷だった。13才のプリムローズは一人ぼっちになった。俺は別れ際プリムローズに鱗を一枚残して行つた。それからどれだけの苦勞をしたことか、プリムローズは様々な町で召喚士として仕事をしながら、ついに俺の山の近くの村までたどり着いた。そこは俺が初めてプリムローズと出会った村であり、プリムローズの故郷でもあった。俺はプリムローズが近くに來たことを感じ、まだ癒えない魔力ではあったが、久しぶりに山を降りた。力量が足りていればローズの時同様に召喚契約を結ぶつもりだった。俺が山から降りて10分くらいだろうか？村が燃えているのが見えた。上空を旋回して見ると5mばかりになる肉の巨人……といっても俺より全然小さいが、そんな怪物が村を襲っていたのだ。俺の体調は完璧ではなかったが俺の縄張りででかい面をする（といっても顔はみあたらなかったが）不屈きな化け物を爪で引き裂き、火炎を吹き付け破壊していった。横合いから飛びかかって來た巨人が俺にしがみつく。一匹しがみついていたら何匹もしがみついてきた。

「邪魔だ、燃えろ！」俺は全身を発火させ一気に巨人達を倒すが、これが良くなかった……なんと力加減を忘れて魔力を使い果たしてしまった。まだ10体ばかりの巨人が残っている。そんな時、息を切

らせてプリムローズが俺の目の前に現れた。プリムローズは竜語で俺に契約を迫った。俺は1も2もなくその契約に応じたのだった。プリムローズの選択した攻撃スキル『メテオバースト』で産み出された巨大な火球は巨人をまとめて焦滅した……あれは今までで発生させた中でも一番の火球だった。問題はその後だった。再び魔力を使い果たした俺はなんと幼体になってしまったのだった。壊滅した村の犠牲者を弔って俺とプリムローズは再び旅に出た。目的はプリムローズの故郷を滅ぼし、俺の縄張りに手を出したクソ魔族の討伐。といえども宛の無いプリムローズは俺にどこにいくべきかを聞いてきた。「そうだな、昔俺が王国で暴れていたころ、勇者とかいう生き物に一回負けたことがある。今も新しい勇者がいるだろうからそいつに協力してもらえば村を襲った魔族も倒せるだろう」

こうして俺とプリムローズは勇者を探して旅に出たのだが…勇者の野郎しょっちゅう遠征に行つてやがったせいで実に二年ばかり行き違いが続いていたのだ。今度こそ確実な情報を手にいれたはずだったが…無事だと良いのだが…。まあ魔力回路も繋がってるし無事なのだろう。俺はそう考えると近所の地域猫ミー君と、鳩のデッポがベランダに遊びに来たのでこの昔話をしてやった。

「アンディの話はいつも面白いよね」

デッポがどこ見てんだかわからない惚けた顔でそう言うとミー君が「プリムローズ可哀想じゃん……」と号泣している。泣き上戸らしい。「あー、でも多分大丈夫だろ。この部屋の安藤が向こう行つたし」

俺が適当にフォローを入れるとデッポが硬直した。

「安藤さんって極悪人でしょ？ヤバくない？」「うーん、見た目は怖いしやってることも怖いし、たまに肩に悪霊とか生き霊とかついてるけどニボシくれるから良い人だよ」ミー君がビビるデッポの意見を否定した。

結局、安藤が部屋に帰って来るのは3ヶ月近く先であり、俺が向こうに行けるようになったのも3ヶ月かかった。俺が久しぶりに会っ

た安藤とプリムローズは少し見ないうちに何かしらの心境の変化があったようだが、それは俺の知ったことではない。俺のお話は以上だ。

（後書き）

読破ありがとうございます。さて、ここでは2の設定等を公開させていただきます。まず砂嵐の魔人シムーンですが、色々ありまして魔王とは先祖と子孫の関係だったりします。寿命やら何やらと魔王の息子がらみなどでシリアスなシーンがありました。主人公二人に絡まないで容赦なくカットしました。ラスボスの超魔人ですが、奴の存在は安藤からするとケーキの横に巻いてあるビニールとか、新作ゲームのパッケージのビニールとかみたいな邪魔ゴミのため、いちいち見られていません。2は安藤の心境の変化があるイベントだけを追ってお話にしてあるため関係ないものを切りまくった。中身が甘口に……。ゴーパーとか城ですごい活躍するし、タイソンとビルの見せ場もあります。……カットです（笑）筆者の力の無さと微妙なコンセプト故の仕様です。でご容赦いただきたいと思えます。ちなみにシムーンですが、実際の砂嵐の名前で、巻き込まれると死にます（マジ）また1のキャンサーは肉の魔神ということで、癌から取っています。最後にプリムローズに関してですが、今回の話を読むとよくわかりますが環境のせいでめっちゃ愛情に飢えてます。安藤が面白い奴でイケメンであることをさっ引いたとしても数ヶ月優しく接してあげればコロっと落ちます。むしろ安藤が硬派だから3ヶ月近くくっつかなかったと言って良いでしょう。アンディがいるときはアンディが威嚇しまくっていたので変な虫がつきません。アンディと合流するまでは悲しみで回りが見えてないので変な虫も寄りません。安藤がいると安藤のせいで変な虫がよりつかず（寄ってくる）とジャンプさせられてチャリンチャリンいった物を没収されます。安藤がいないときはアンディと勇者パーティーがいるので変な虫がつかない純粹培養ヒロインです。可哀想な子なのでハッピーエンド以外のファンタジーが嫌いな筆者はきちんと物語を進めたキャラクターには御褒美をあげたい主義なので2の最後はご都

合主義な終わり方をしています。また次のお話で会えることをお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7056/>

召喚獣が還るまでver1.5

2010年10月8日21時25分発行